大手前大学論集　第22号（2021）pp. 129－147

コミュニティにおける高齢者の居場所

― 高齢者によるボランティア活動に注目して ―

湯　　艶*

要　旨

高齢者の居場所というと、高齢者施設もそのひとつになっている。そこは高齢者にとって一つの安心な居場所であるからなのである。しかしながら研究者たちの指摘によれば、そこは、しばしばルールが優先され、その結果、高齢者たちの自己決定の割合が低かったり、孤独・孤立化などといった問題点が生じている。

大切なことは地域コミュニティも高齢者にとって一つの居場所であることである。コミュニティがどのような居場所であるのか、なぜ高齢者たちがその居場所に満足するのかについて、とくにボランティア活動に注目しながら分析した。その結果、コミュニティは高齢者にとって「人間関係としてのつながり」、「社会貢献による充実感」、「新しい自分の発見」という面で有意義であることが分かった。

キーワード：高齢者、コミュニティ、居場所、ボランティア

1　本稿の課題と目的

しばしば高齢者の課題として、高齢者の居場所というものが問題となる。なぜなら、高齢者にとって自分のやすらぎのための空間としての居場所というものがとても大切であるからである。さて「居場所」の意味であるが、高齢者の居場所を研究している中村美智代たちによる定義がしばしば研究論文で使われているので、その定義に従っておきたい。すなわち高齢者の居場所とは「高齢者が、一人で安心していられたり、他者との交流を楽しんだり他者の役に立ったりするなどして、自己の存在が実感

＊大手前大学大学院比較文化研究科

できること」（中村美智代・大橋徹也・松山光生、2019、pp. 36-37）である。

伝統的に家族が居場所としてその役割をはたし、また期待されてきた。だが近年はその負担の多さや独居の問題が生じてきて、家族を補填したりそれを代替したりするものとして、日本でも中国でも政府の施策として高齢者施設を重視している。高齢者施設はたしかにひとつの大切な居場所であるが、次の章で明らかにするように、高齢者は必ずしも居場所としての側面では高齢者施設に十分に満足をしていない。

高齢者施設に代わって、コミュニティというものが居場所としての機能をもつかもしれない。そのような考えにもとづく論文がすでにいくつかある。たとえば丸尾直美・宮垣元・矢口和宏は「ふれあいサロンやコミュニティカフェ、自治体が取り組み始めている総合事業など、社会福祉や保健福祉の現場で進められている地域の高齢者のボランティアへの関わりの促進に加えて、地域における高齢者の就労を支援していくことも、今後の高齢者の地域での役割や生きがい、居場所づくりとして、さらには地域の活性化としても重要ではないだろうか」（丸尾直美・宮垣元・矢口和宏、2016、p. 109）と指摘している。これは高齢者にとってのコミュニティと居場所を結びつけた視点であろう。

また、鈴木幾多郎は以下のように述べている。すなわち「今後、益々進展する超高齢社会においては、居住地域で過ごす時間が多くなる高齢者にとって地域での人々とのつながりの中で住み慣れた地域・自宅で自立した日常生活を送れることが望ましい。しかし、今日の地域社会では、人間関係がますます薄くなり、高齢者が主体的に行動し他者と繋がらない限り、誰も世話を焼いてくれず、誰もかまってくれない社会になりつつある。このことは、高齢者の孤独、孤立化を招くことになる。それを乗り越えるためには、高齢者は地域の人々とのつながりを強め、新しいコミュニティを作らなければならない」（鈴木幾多郎、2017、p. 146）。鈴木は現在の高齢者の孤独化を問題としてとりあげ、その解決策を高齢者が主体的になるコミュニティの諸組織に求めており、本稿の関心と同じである。

上條秀元は「地域との関わりを広げるきっかけとなる“プラットホーム”としての役割」（上條秀元、2007、p. 2）の重要性を指摘している。このように高齢者にとってのコミュニティの果たす役割に気づいている研究者が散見される。

本論文では、コミュニティのなかでの、高齢者ボランティアの活動を分析することを通じて、なぜ、そしてどのような環境において、高齢者がコミュニティの居場所に満足するのかをあきらかにすることを目的としたい。この分析をつうじて、高齢者施設が十分に与えることができないコミュニティ固有の高齢者にとっての魅力をさぐることになろう。

そこで最初に、とくに居場所に焦点をあてながら、既存の高齢者施設が、利用者に

とってどのような長所や問題点があるかを整理しておきたい。

2　高齢者施設の特色

高齢者施設の典型としての養護老人ホームは、厚生労働省の定義に従うと、介護保険の３種類の施設として、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、介護療養型医療施設に分けられる。そしてそれらは、高齢者向け住まい、施設にはサービス付き高齢者向け住宅、有料老人ホーム、養護老人ホーム、軽費老人ホーム、認知症高齢者グループホームなどに分けられる（厚生省社保審―介護給付費分科会の施設・居住系サービスについてのホームページ、pp. 1-2）。

これらの高齢者施設は高齢者の居場所の一つとして、大切な社会的役割を果たしつづけていると推定される。だが、これらの施設は高齢者にとってどんな居場所であるのだろうか。つぎに高齢者施設の長所と欠点に留意しながら、高齢者の居場所について説明を加える。

厚生労働省の見解・専門的ケア・経済的安定性

厚生労働省、社保審―介護給付費分科会によって作成された介護老人福祉施設の『参考資料』によると、ユニット型施設においては、ハードウェアとソフトウェアの双方ともに、認知症高齢者ケアにも有効であるような配慮がなされている。「認知症ケアに有効」とは、小規模な居住環境、家庭的な雰囲気、なじみの人間関係、そして在宅に近い居住環境、入居者一人一人の個性や生活のリズムに沿っており、他人との人間関係を築けるからであると述べている（『参考資料２』p. 18）。すなわち厚生労働省の見解としては、ケアされる者の必要に応じて対応しており、とりわけ認知症高齢者に配慮しているということである。

では実際の介護ホームではどうなっているのであろうか。ある介護ホームの魅力としてホームページでは、以下のような説明がみられる。「介護付有料老人ホームは主に民間の事業者によって運営されている介護施設で、食事や清掃、身体介護、リハビリといった通常の介護サービスだけでなく、レクリエーションやサークル活動など幅広いサービスを受けることができる。施設のケアマネジャーが入居者の状態を確認しながら介護計画をたてるため、提供されるサービスはニーズに即したものとなる。（中略）24時間体制で介護を受けることができる」[1]（あなぶきの介護、ホームページ）。

また経済的な側面として、在宅高齢者と施設入所者を対象とした調査で、津軽谷恵は「施設入所者は、在宅高齢者に比較して、毎月の支出が安定しており経済状況に関

しての満足感が得られていること」（津軽谷恵、2003、p. 52）であると指摘した。ケアがいきとどき経済的にも安定しているという指摘である。

高齢者施設の課題

すでに高齢者施設においていろいろな問題があることが以下に示すように研究者によって指摘されている。その指摘にしたがうと、それらは大きく次の３点に要約される。その３点とは「施設の量的不足」「施設福祉の質的な未熟さ」「介護福祉士の不足」である。

川村匡由は「高齢者の寿命が延び、年齢の上昇とともに、寝たきりや認知症の要介護高齢者は増加する。しかも高齢化率の急速な伸長により、要介護高齢者の絶対数も増えつつある」（川村匡由、2005、p. 170）と基本的な問題点を指摘したのち、さらに川村は次のような具体的な問題点を取り上げている。ひとつは家族介護力が低下していること。ふたつめが特別養護老人ホームをつくりつづけても、つねに潜在的なニーズがあり、施設不足がつづいていることである（川村匡由、同上、p. 170）。その他、施設不足を指摘している論文は多い（森川洋、2018、p. 45、小黒一正・平方啓介、2017、p. 68、飛田英子、2015、p. 52など）。

２点目の「福祉施設の質的な未熟さ」であるが、代表的な論文を一つだけあげると、楠永敏恵・山崎喜比古は「職員との関係における不満をたずねると、31人中18人が不満を表明した。職員の不親切な態度、不機嫌な態度、職員の配慮に欠ける行為、介助が自分のペースに合わない」（楠永敏恵・山崎喜比古、2003、p. 86）。またサービスと設備に対する不満として「21人が食事の内容などが嗜好に合わないことがあるし、10人がレクリェーションの内容が希望に合わないことがある」（楠永敏恵・山崎喜比古、同上、p. 87）と回答したという。

３つめの「介護福祉士の不足」であるが、丁英順は「介護福祉士が足りないので、高齢者施設が空いても、入れない高齢者もいっぱいいる。日本の厚生労働省の予測では、2025年に日本は253万の介護福祉士が必要である。しかし、現在の介護福祉士の増加の傾向を見ると、その時介護福祉士が38万も足りない」（丁英順、2016、p. 63）と述べている。新井康友・原田由美子も類似の指摘をしている（新井康友・原田由美子、2015、p. 44）。すなわち、上記のような３つの指摘がある。

3　高齢者施設の活動内容と高齢者の居場所

高齢者の活動内容

施設においてはルールが優先され自己決定が期待されないところがある。例えば、

羽田圭子は「高齢者が施設に移り住む理由としては、自宅の手入れ、掃除、食事の支度等が負担になること、日常的に介助や介護が必要になること、緊急時の対応に不安があることなどが挙げられる。施設においては、（中略）安全性や生活の利便性は高まるが、共同生活のため施設のルールに従うことが求められ、生活における自己決定の範囲、すなわち自律性は低くなるであろう」（羽田圭子、2017、p. 2）と指摘している。

羽田圭子と類似の指摘として、鄭春姫はつぎのようにいう。「施設入所高齢者の生活を考えてみると、一日同じフロアでの生活をするようになり、できるのにさせてもらえない、身の回りのことは何もやることはない等による能動性の低下がみられる」（鄭春姫、2016、p. 26）という。

孤独や孤立化も問題である。鈴木政史は「社会福祉施設が地域社会から孤立した状態にあり、社会福祉施設に関わる人が、高齢者、児童、“しょうがい”を持つ人とその家族、職員・ボランティアなど、一部の関係者だけで構成され、地域社会から隔離されている状態はノーマルではなく、今後の社会福祉施設における地域社会との関わりは地域住民を含めた多様な人と共に活動・生活するという視点が不可欠である」（鈴木政史、2009、p. 32）という大切な指摘をしている。

藤原武弘、来嶋和美は老人ホームの孤独感の高さ、という注目すべき指摘をしている。すなわち「老人ホームの老人と独居老人の孤独感の高さを比較すると、前者のほうが孤独感が高いことが明らかになった」（藤原武弘、来嶋和美、1989、p. 63）という。

居場所としての高齢者施設の長所

高齢者施設の長所として「介護プロの存在」「居場所感・安心感」が指摘されている。

たとえば吉岡なみ子は「1987年の社会福祉士および介護福祉士法の制定は、介護職員の専門性の確立や、これに対する社会的評価を高める契機になった」（吉岡なみ子、2011、p. 106）と指摘している。

「居場所感・安心感」では、中村美智代の実態把握調査では、「入所施設利用者の“居場所感”は、概ね物理的居場所感が高く、役割的居場所感の低い傾向にあることが分かった」（中村美智代、2018、p. 23）と、少なくとも施設のよさでは居場所感があると想定される。伊藤智子・加藤真紀他は「家族との頻回な面会や外泊時の近所の人との会話が今までの社会とのつながり感を保ち、本人の心の安定につながっていると思われた」（伊藤智子・加藤真紀他、2007、p. 52）と外部との交流があれば居場所感が保証されると解釈できると指摘をしている。

居場所としての高齢者施設の問題点

永松美菜子・村山浩一郎は介護職員からの虐待を指摘している（永松美菜子・村山浩一郎、2016、p. 24）。大橋美幸（大橋美幸、2012、p. 85）や原田聖子（原田聖子、2014、p. 75）も類似の指摘をしている。

なお、この虐待の件数については、表１に示すとおりである。

表１　高齢者虐待調査結果

	養介護施設従事者等によるもの		養護者によるもの	
	虐待判断件数	相談・通報件数	虐待判断件数	相談・通報件数
令和元年度	644件	2,267件	16,928件	34,057件
平成30年度	621件	2,187件	17,249件	32,231件
増減（増減率）	23件（3.7%）	80件（3.7%）	−321件 （−1.9%）	1,826件 （5.7%）

出典：https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000196989_00003.html　厚生労働省令和元年度「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果、閲覧日：2022年２月11日。

問題点として、孤立感の指摘も多いが、ひとつの論文だけ紹介しておく。中村美智代の「住居を変えることに伴う過度の負担は、高齢者の心身に悪影響を及ぼすリロケーションダメージとなる。このダメージは、高齢者に心理的な混乱を生じさせ認知症等を急速に進行させる恐れが高く、高齢者の意欲を低下させる。本来、安心して暮らせるはずの施設での生活が急速に高齢者に生活不活発病をもたらすのである。この生活不活発病に陥った高齢者は、他者との関係を喪失してしまう。これにより、施設での生活や地域、社会においても“居場所がない”と感じるようになる。その結果、孤立感が増加する状況に陥ってしまうため、居場所の獲得が重要だといえる」（中村美智代、2017、pp. 17-18）。施設という新しい居住地に移動することによる孤独感の指摘である。

4　コミュニティにおける高齢者の居場所の事例

筆者自身の聞き取り調査に加えて、すでに存在する類似の事例を既発表の報告や論文等から拾い出して、コミュニティにおける高齢者の居場所の事例を紹介する。その後、第５章でこの事例を中心にして分析をおこなう。

交流を通じてつながりを形成し、居場所をつくる

最初にいくつかの調査報告に依拠しながら事例を紹介する。

静岡県掛川市の運転ボランティアの例である。この地区ではマイカー時代が到来して、路線バスが廃止された。それに代わって、とくに必要とされる病院への通院に対して、ボランティアが行う“通院車”が登場することになる。

「生きがいとは人との触れ合いの中の感動によって生まれるもの。運転ボランティアは人生における感動以外の何物でもない」（横橋孝保、2010、p. 15）との思いを伝えているという。そこでは病院からの伝言を家族に伝えるなどして、まさに地域全体で高齢者を見守っている。

運転ボランティアの人が言うには「“友愛はらだ号”は単に高齢者を病院へ運ぶだけではなく、地域の人々の交流の場にもなっている。車内では野菜づくりの話やお孫さんの話などいろいろな話題が飛びあい、その安堵感から少しの間でも身体の痛みを忘れるほど会話が弾む。（中略）こんな時代だからこそ人と人との触れ合いを大切にしなければ、地域の繋がりを育てていきたい」（同上、p. 16）という。つまり“友愛はらだ号”はいわば動く交流の場となっているのである。

つぎは「ふれあい朝市」の例である。北九州市八幡西区の茶屋の原団地でも高齢化が進んでいる。朝市が行われる火曜の早朝には、地元老人会の会長が宣伝カーで団地を回って朝市を PR している。メンバーのひとりが言うには、「定年して暇だから、健康のために野菜を作って自分で食べていたんだけど、余ったものをみんなにも格安で分けたいと思った」（中河原文、2010、pp. 14-16）という。

「野菜をつくって儲かるということはないけれど、お客さんと顔なじみになってここで話すのが楽しいね」（同上、p. 16）というように、顔なじみ、楽しさ、拠り所をつくる、というようなことがキーワードになっている。

横浜市戸塚区の俣野町と深谷町に広がる大規模中高層団地“ドリームハイツ”では、「住民の高齢化が進む中で、日中ひとりで淋しい、誰かとおしゃべりしたいという声が聞かれるようになった。そこで地域住民が利用者やボランティアとして関わり集える高齢者のための居場所として交流サロンをつくることになった」（清水英孝、2014、p. 11）。この交流サロンには専従職員がいなくて、すべての活動はボランティアの手によって運営されているという。

滋賀県の草津市の事例である。「就園前の子どもを連れたお母さんたちが、草津まちづくりセンターの 2 階に集まってくる。このビルの託児室で子育て支援サポート広場“ふあふあ”が開催されているの」（幡郁枝、2010、p. 17）である。「男性スタッフはクリスマスにもサンタクロースの扮装をするなど人気者だ。“最初はお母さんにしがみついて離れなかった子が何度も来るうちに他の子どもと遊ぶようになっていく姿を見ると、ここで社会性を身につけているのを実感しますね”と渡辺さんも大西さんも目を細める。（中略）渡辺さんは“男性では私とナルクびわこ湖南代表、中田匡美

さんがほぼ皆勤。この子育て支援広場は元気の素なんですよ。子どもたちから元気をもらえます。それによく笑うようになりました。地域の孫育てに貢献しているという喜びが生き甲斐となっています”」（同上、pp. 18-19）と言っている。高齢者に生きがいを与えている活動である。

珍しく男性だけの活動もある。“じゃおクラブ”は神奈川県全域に会員をもつシニア男性の地域集団である。「現在は、就労現役・定年退職 OB ら170余名の男性会員が、新横浜を中核拠点にして、湘南（藤沢・平塚など）、県央（海老名・相撲原など）、横浜北部・川崎北部、横浜南部・川崎南部と 4 地区に分かれ、福祉施設との交流、森林ボランティア、市民的農業といった地域活動に取り組むとともに、それぞれに男性会員同士の交友を楽しんでいる。この“じゃおクラブ”での活動を契機にして、私は他の相当数の市民活動団体とも次々と交流し、地域社会に関しての情報・意見を交換する機会を得た」（守永英輔、同上、2006、p. 32）という。

これは全国の目立つ活動をピックアップした側面があり、すべての高齢者ボランティアがこのようにうまくいっているとは言えないかもしれないが、ともあれ、交流を通じて、生きがいをみつけ、それが相互のつながりとなって、その活動の場が居場所となっていることを指摘できよう。

社会貢献

上のつながりの形成の事例の多くはまた社会貢献の事例でも、ここでは社会貢献をすることによる自分自身の喜びや満足感が表れている事例を集めた。次の事例は兵庫県西宮市の松下町を筆者自身が直接にインタビューした事例である。

松下町夙川公園を美しく保つとともに、清掃作業を通じて互いの親睦・交流を図ることを目的に、自治会会員有志で毎月第 2 土曜日 9 時～ 9 時40分公園清掃を行なっている。参加者はだいたい20～25名である。D さんが言うには、ボランティアはだいたい65歳以上の高齢者である。ときどき近くの保護者が子どもを連れていく場合もある。毎回清掃する時、タバコとか、ペットボトルとか、空き缶とか、特にタバコが多い。

D さんに、この清掃作業をなぜやるのかと聞いたところ、「清掃したら、きれいになって、嬉しいから」と答えてくれた。もう一人の84歳の K さんもときどき清掃に参加する。同じ質問をしてみると、K さんが答えたのは「家では一人なので、ときどきこれをやると体にもいいし、公園がきれいになって自分も嬉しい」と答えてくれた。ここでいう嬉しいは、清掃という社会貢献に役立って嬉しいという意味である。

次の事例も筆者がインタビューした西宮市の NPO 法人チーム御前浜・香櫨園浜里浜づくりの F さん[2)]、M さん、L さんの話である。

NPO 法人　チーム御前浜・香櫨園浜　里浜づくりというグループは会員が30名いる。今年で活動は８年目になる。１人の高齢者ボランティアが35人の小学生を引率する。小学生に環境学習を教えるのである。

Ｆさんがいうには、いまから２年前の秋ごろ、コンビニに入っていくと、男の子が私（Ｆさん）を見て「アッ！里浜のＦさんだ」と声をあげた。声の方を見ると、小学３年生くらいの男の子が２人いてニッコリ笑っていた。覚えていてくれたとうれしかった。夙川公園を昨年の春に自転車で走っていると、“里浜の人だ”と数人の小学生が遊んでいてこちらを見てニコニコ手を振ってくれた。よく覚えてくれているなと思ったという。

このＦさんは「NPO 法人　チーム御前浜・香櫨園浜　里浜づくり」のリーダーである。78歳である。もともとはワイヤーの工場で工場長として働いた。若い時は趣味もなく、家族のこともあまり配慮しないで仕事だけに夢中になっていたという。

以上のＦさんの言葉から、わたしはＦさんがボランティアをやることを通して、多くの人に覚えられることが、何より嬉しいことであるのが分かった。

さらにＦさんはつぎのようにも言っていた。小学校の担任の先生が児童に説明をしているのを聞いて、「浜のことが良くわかりました。ありがとうございます」と御礼を聞くと役に立っているのだなと思った。現地授業に参加したお母さんが、「近くに住んでいるのに浜を良く知らなかった。今日はたいへん勉強になりました、子どもと共通の話題ができて良かったわ」といってもらえた。１学期の浜の生き物の観察で、「初めてカニを捕まえた」と大興奮した児童を見ると良い思い出を作ってあげられたと喜びを感じるという。

また、実物のクラゲを見たことがない子どもが多いので、打ち上げられたミズクラゲを触って大騒ぎしているのを見ると、このボランティア活動をやってよかったと思うとＦさんは言っていた。

ここで筆者としてまとめてみると、地元の人、小学校の先生、そして小学生達に浜の環境学習内容を教えて彼らに身近な環境をもっと了解してもらったり、地元の環境保護を考える意識を育てられるので、ボランティアをやって社会に役にたつ満足感を感じているようだ。

Ｍさんはつぎのように言う。仕事をしていた時に使っていたノウハウは仕事を辞めるとほとんど使わなくなるのでなんだか寂しい。けれども、ボランティアで活動していると、パソコンでエクセルを使って資料作りができたり、写真の編集をしたりできているので良かった。若い時からずっと身につけたパソコンの技を、定年してもボランティアをしてまだ使えるなんて、また社会に貢献できる満足感もある。そのようにＭさんは考えているようだ。

またＦさんが言うには、ボランティアが今までの会社の仕事と違う。会社では目標に達するために、常に頑張らなければならない。けれども、ボランティアは気楽さがあり、やったら成果が出ることがあるが、もし何か足りない所があっても「ごめん」と言ってもいいのである。ここで仲間達と一緒に会うことができて、日曜ごとに浜の清掃、除草などをしているが、昼にはワンコインで皆で飲みながらワイワイガヤガヤで、この仲間はいろいろな経歴のある人達で話が面白い。ボランティアをしていることによるもう一つの楽しさというと、「昼間でもお酒が飲める」ということである。もし家で昼間にお酒を飲んだら、女房からいろいろ言われる。しかし浜の掃除等をして仕事をしてから仲間達とお酒を飲むと、別に注意もされない。

もしボランティアをしていなかったら、しゃべる所がなかっただろう。みんなで飲んでわいわいと政治や日常などのいろんな話ができる。ボランティアの仲間の間では利害関係を考えないで気楽に話せる。もしボランティアをしていなかったら、ただ夫婦の間での話でテーマは少ないし面白くない毎日を送る。仲間達と話をしていると意見の違いが少ないし、揉めることは少ない。

ＬさんはＦさんの紹介で「NPO 法人　チーム御前浜・香櫨園浜　里浜づくり」ボランティアグループに入った。Ｌさんが言うには「ボランティアをやって達成感がある。仕事をやめて家にいる時間が長くなる。顔を合わせる人、挨拶ができる人、同じ近所に住んでいても、関係する人は少なくなる。顔なじみの手段としてボランティアをやることである」と言っていた。

Ｖさんは友人に勧められて、日本シルバーボランティアズ（JSV）に入会する。JSV は農業、工業、教育等、さまざまな専門家をアジア地域へ派遣しており、Ｖさんは中国山東省済南市石門村に出向く。果樹の生産に協力し、石門村は一大果樹産地として発展した。「自分としては当たり前のことをしただけだと思っていますが、日本の最高の技術を中国に教えることができたという満足感はあります」（NEC ユーザー会ホームページ）とＶさんは受賞の感想を述べている。これは自分の技術を外国で生かして、現地人に喜ばれた満足感の例である。

つぎは筆者の調査ではなくて、文献のデータに依拠している。

広島県呉市のふれあい広場のある三条地区は、近年、高齢化、人口減が進み、商店街の空き店舗化が進んできたものの、同じ時期にマンションが建てられ人口の流入も見られる地域である。「ふれあい広場は平成24年９月にオープンした。開設場所は商店街の空き店舗（約11坪）を活用した。活動のそもそもの発端は２人の女性の思いからであった。二人とも地区での活動を行ってきており、三条地区のまちと、人の移り変わりを目のあたりにしてきた人達である。Ｂさんは、男性一人暮らし高齢者が行き場がないことを見かねて、個人で高齢者サロンを運営していた」（大藤文夫、2016、p.

54）という。

「運営は上記の２人を含めて、ボランティア計18人（女性12人、男性６人）で、１日を３人で分担している。ボランティアは利用者の見守り、お茶の接待をし、話相手になっている。教室には、らくらく体操、うたごえ広場、手芸がある。これらの活動の評価については“大人と子どもの自然な交流が生まれている”、“ボランティアは活動に非常に喜びを感じている。ボランティア自身の介護予防になっている”、“高齢利用者も子どもも“あってよかった”といっている”」（同上、p. 56）という。これらの事例には社会貢献をする喜びがでているように思う。

新しい自分の発見・自己表現

奥村司やその他の研究者の調査によると以下の通りであった。

Ｕさんは38年間の教職生活を終えた。“退職後は好きなことをしてのんびり過ごそう”と考えていたが、健康生きがいづくりの資格を取得して自身の生きがいづくりに役立てている、という記事を見つけて活動をはじめる。そして「中高年の健康と生きがいづくりを目的に“らくらく体操教室”を平成14年に開講。以来、講話の依頼をされるようになり、また福祉施設などでも講話に加えて以前から得意としている手品を披露するボランティア活動をするようになり、アドバイザーになってから１年足らずで社会活動に参加でき、人に喜んでいただくことを自分の喜びを実感する」（奥村司、2014、pp. 14-18）。これはひとつ前の社会貢献の喜びの事例ともなろう。

彼はいう。「皆さんが喜んでくださる顔を見ると生きがいを感じます。自己満足ですが、こういう自己満足なら最高だと思うのです。年を重ねると体力は劣ってきますが、心は劣りません。でも心をさびさせないようにいろいろな人と話したり知識を得たりして磨く努力が大切だと思う。そして自分の居場所をつくり、自己挑戦、自己発信、自己実現をしていく。私の居場所は体操教室でつくることができた」（同上、pp. 18-19）。Ｕさんは退職後のあたらしいボランティア活動をつうじて、新しい自己実現をすることができたのである。

Ｐさんが58歳のときに健康生きがいづくりアドバイザーの資格を取得する。愛媛県長寿社会振興協会が高齢者の仲間づくりの活動をするボランティアを募集していたので、メンバーに入って３年間活動をする。そしてつぎのような感想を述べている。「いつもたくさんの人が来てくれ、人に喜んでもらえる楽しさを実感しました。そして他人を楽しませることで自分が満足し、仲間ができてそのつながりがどんどん広がっていくことのすばらしさを知りました」（沖中正明、2014、p. 29）。

さらにつぎのようにいう。「アドバイザーの活動を通して人に喜んでもらう楽しさを知ってからは、生き方が変わりました。目標が多くなって行動的になり、性格も社

交的になりました。定年後にマジック、腹話術、詩吟、ソーシャルワーカーとしての電話相談、講演、執筆活動などをはじめました。それぞれに一緒にやる仲間がいるので、年齢もバックボーンも違う仲間が増えました。マジックと腹話術はゲストの前でやろうと思って、はじめたのですが、今は福祉施設、敬老会、子ども会など、時には大きな舞台でも披露している。自分でもこんなことをやるようになるとは思いませんでした。サラリーマンの時代の私を知っている人が見たら、びっくりすると思います」（同上、p. 30）。このようなかたちで新しい自分の発見ができたのである。

5　コミュニティにとっての高齢者の居場所の意味

高齢者の居場所というとき、第４章が示した事例から次の３つの要因が作動したときに、本人たちにとってそこが居場所と感じられるようになるといえるのではないだろうか。その３つとは「つながり」「社会貢献」「新しい自分の発見」である。そのため、高齢者施設との比較を視野に入れながら、コミュニティにおけるこれら３つの要因を分析することにする。

人間関係としてのつながり

前章の事例から推察すると、つながりはつぎの３点の特徴をもっているように考えられる。ひとつが、「ふれあい関係」である。コミュニティにおけるつながりというものは人との接触、触れ合いを通じて深くなる。たとえば、第４章の中で、運転ボランティアの例にもそれが如実に表れている。運転ボランティアというのはただ運転手をするだけではなくて、付き合っているうちに高齢者ボランティアは家族みたいな存在になる。付き合っているうちに、いろいろな話題が出てきて繋がりが深くなった。コミュニティは高齢者ボランティアにとって人と人の触れ合いを育てるところになる。

他方、高齢者施設では第３章で示したように、そこで働いている人が老人ホームの決まったルールに応じて仕事をする。そこでのふれあい関係は、仕事の順序に応じてサービスをするから、人間的な深さに欠ける場合が少なくない。それは余裕と時間に恵まれていないことによるという指摘があった。

二つめが「家族みたいな世代間交流」が成立するということである。いまふれた運転手も家族のようだ、と言っていたが、その家族が親子や祖父母と孫というような世代間の交流によるつながりである。たとえば第４章の中で「子どもたちから元気をもらえます。それによく笑うようになりました。地域の孫育てに貢献しているという喜びが生き甲斐となっています」と言っていた。また「男の人が私を見て、“あ！里浜

のＦさんだ”と声をあげた。声の方を見ると、小学３年生くらいの男の子が２人いてニッコリ笑っていた」というような例も、子供と祖父世代の親しみのある関係性を示していよう。

コミュニティでボランティアとして子どもの子育てに力を入れて、自分が幸せを感じながら笑う場合が多くなる。子や孫たちの世代との間の世代間交流によって高齢者ボランティア自身は喜びをもらいながら元気になっているし、高齢者ボランティアと下の世代との世代間交流がつながりを生じさせている。

それに対し高齢者施設では積極的な世帯間交流がむずかしく、主に受け身としての交流となりがちであるという指摘があった。

三つめが「まちづくり活動を背景とした」つながりである。まちづくり活動においては、行政が音頭をとっているし、この地域では阪神淡路大震災を経験したので、住民が自らたちあげたまちづくり活動もある。このまちづくり活動が高齢者ボランティアのつながりを強める組織的機能をはたしている。

たとえば、第４章の中で、「東日本大震災の教訓から、現在は“つながり”が見直され、街づくりに大きく生かされている」というまちづくりがつながりと強くかかわっているという表現があり、まちづくりがつながりを強める役割があることがわかる。また、先にあげた「じゃおクラブ」の事例もまちづくりを通じて人間同士のつながりを強めているものである。

社会貢献による充実感

社会貢献の特徴としては、３つが考えられる。１つは「自分が行って嬉しい」ということである。ここでいう社会貢献は具体的には地域社会への奉仕を意味する。そしてそれは自分が満足感を感じることによる喜びがともなっている。

ところで高齢者ボランティアの人たちは、自分がやっていることが社会貢献であることは自分自身でも意識しないことが実際には多い。つまり本人が気付かない社会への奉仕となっている。自分自身が自発的に一生懸命に社会奉仕をするのだけれども、自分が当たり前だと思っていて、周りからもさほど気付かれないものかもしれない。

たとえば、「Ｄさんと多くの高齢者ボランティアたちが公園清掃を行なっている。タバコとか、ペットボトルとか、空き缶とか、特にタバコが多いな。やった後できれいになった。自分が嬉しい」という。簡単に“嬉しい”と言いながらも、長年続けてボランティアをした素直な気持ちの表れである。Ｋさんのような高齢者たちがきれいな環境を保ちながら生活するのが望ましいと思って、ゴミを捨てる人を監督する、命令ではなくて、自発的な行為を通して、周りの生活環境をきれいにしていっているのである。

しかし、高齢者施設では第３章で示したように「施設入所高齢者はほぼ一日中同じフロアにいると視覚まで受け身となり、同じ物・ことだけ見えるため、無味乾燥な日常になりがちであると考えられる」というようなことになりがちである。これはあるいは極端な指摘なのかもしれないが、高齢者たちが施設での生活が無味乾燥になりがちなようである。通常は自分で勝手に外出ができないので、嬉しい気持ちでなにかやって社会貢献を考える環境や雰囲気もないようである。

二番目の特徴としては、「孤独の解消」としての社会貢献である。高齢者ボランティアが同じ高齢者の孤独・孤立感に気がついて、自分の力で孤独の高齢者のために居場所を作りたいと考えているようである。

たとえば第４章で述べたように、三条地区では高齢者の孤立問題があって、居場所のない高齢者が多いことに気づいた。また居場所がない子どももいた。そのため、高齢者ボランティアの人たちは自分たちの力でふれあい場を作り、高齢者と子どもの交流もできるようにした。

また、他者の孤独の解消もあるけれども、自分自身の孤独の解消もあることに注意をしておく必要がある。たとえば「顔なじみの手段としてボランティアをやることである」と言っていたように、自分の孤立の解消もみられる。

しかし、高齢者施設では、第３章に示したように、ホームに住む高齢者は外で住む高齢者よりもっと孤独感を感じているようである。またホームに住む高齢者が接触できる人はだいたい自分の子どもと親戚だけである。子どもと親戚以外の人との接触がすくないため、社会ネットワークはあまりない。そのため自分が熱意を持って積極的に自分の力で孤独の解消へのことを考える高齢者は少ないという。もっとも常識的に考えて、高齢者施設でも交流に力を入れていると思われるが、研究論文は課題を追求しがちであるので、そのような積極的な交流の論文を見つけることができなかった。

三番目の特徴としては、少し例外的な特徴であるが、「自分の身につけた技術を活かす」形としての社会貢献も存在する。第４章で示したおもちゃの修繕がその一例である。ともあれ、社会貢献を通じて、高齢者ボランティアたちは充実感をもてているようである。

新しい自分の発見

「新しい自分の発見」の特徴の一つとしては「新しい分野のボランティア仕事に携わる」というものである。そのため、ボランティアの仕事を通して喜んでもらうとともに、自分も楽しさと生きがいも感じるというものである。たとえば、第４章のＵさんは「健康生きがいづくりアドバイザーの資格をとった。アドバイザーのボランティアをして、人に喜んでいただくことを自分の喜びとして実感しながら交流の輪も広が

りました」と言っていた。

またＰさんは「今は福祉施設、敬老会、子ども会など、時には大きな舞台でも披露している。自分でもこんなことをやるようになるとは思いませんでした」と言っていた。

二番目の特徴としては気の合う新しい仲間づくりができて「若い時とは異なった」新しい自分が見つけている。すでに紹介したNPO法人　チーム御前浜・香櫨園浜里浜づくりのボランティアなどがそうである。

三番目の特徴としては自分がやったことが周りから褒められて慰められながら新しい自分を発見して生きがいを感じてボランティア活動を続けたい。つまり「やりがいのある」自分の発見である。たとえば、小学生に環境教育をし、現地授業に参加したお母さんから「今日は大変勉強になりました、子どもと共通の話題が出来て良かったわ」といってもらえたことなどいくつかの事例を第４章で示しておいた。

しかし、高齢者施設では第３章で示したように、高齢者達が主に室内で生活するから、精神的に問題が生じやすいようである。それがコミュニティボランティアとしての生き生きした雰囲気とは異なっているだろうことは否定できない。

6　結論

高齢者にとっての居場所としてのコミュニティがどのような位置づけになるかを検討することを課題とした。もっとも高齢者の居場所と言えば、高齢者施設もひとつの大きな役割を果たしている。高齢者施設は専門的な介護に配慮がいきとどき、プロといえるケアがある。また規則が厳しいことからリズムのある生活を送ることができる。そのため施設は高齢者にとっての安全な居場所として認められる側面がある。

一方、高齢者施設の現場で働いている介護職員等が仕事のストレスのためや人数配置が限られているためか、高齢者に対して虐待がおこなわれているという報告もみられる。

また、すでに紹介したように、研究者たちの研究の成果によると、施設では孤立と孤独を感じる高齢者がかなり多いようである。

在宅や高齢者施設とは異なったもう一つの高齢者の居場所としてコミュニティが最近注目されつつある。第４章に紹介したコミュニティでのボランティアの事例を使いながら、第５章では「つながり」、「社会貢献」、「新しい自分の発見」の三つの視点からコミュニティの居場所の特徴を分析した。

コミュニティで活躍している高齢者たちは人との触れ合いを通して、つながりを築くことができた。また世代間交流があって高齢者たちが元気と喜びをもらった。まち

づくり活動を背景としてのつながりという特徴も見られる。ここではつまり、人間関係の広がりが居場所をつくったのだということができよう。

「社会貢献」において、３つの点を指摘した。ひとつには高齢者たちは自分の行為が役に立って嬉しいという気持ちがある。この社会奉仕による自己満足というのはよく理解できるところである。２番目に、社会貢献の作業を行うことで、相互の人間関係ができ、それが孤独の解消になっているということを指摘した。３番目に多くの高齢者はもともと仕事の現場でいろいろな技術を持っていた。その広い意味での技術を生かすことで、社会貢献をしているという喜びと満足感が自分の居場所感を強めている。

つぎに「新しい自分の発見」という特徴においては、新しい分野に携わって、自分の新鮮さを維持しながら新しい自分の活躍の場を発見している。その結果、新しい友達ができて、いままでと異なったボランティアの体験をすることで楽しく過ごせるので、それを楽しんでいる自分を発見している。また「やりがいのある自分」を見つけ出している。自分の努力によって、周りの人に認められて、一層の自分自身の価値が見つかることによってである。

高齢者ボランティアたちは在宅の生活が多い。在宅しながら、コミュニティ活動ができるのであるが、病気がちになると高齢者施設と比べれば、コミュニティではプロのケアがないので、いかにコミュニティにおける居場所が優れていても、たちどころに施設に依存をせざるを得なくなる。

このように高齢者施設も不可欠である。けれども、詳しく見てきたように、コミュニティというものは一般常識で想定されているよりも、高齢者の居場所としてはるかに大きな役割をもっている[3)]。したがって、高齢者が生き生きとして晩年をすごすためには高齢者施設という選択肢以外に高齢者たちがコミュニティで活躍できる場をつくることを政策的に考えるべきであろう。

この研究を通じて、高齢者の生活の充実というものがとても大切であることが分かった。施設が、どちらかといえばルール重視になる欠点をもっているが、他方コミュニティも年齢の高い高齢者の受け入れにはむずかしいところがある。したがって、それぞれの長所を生かしていけばよいと考える。ただ、とりわけ筆者の国籍である中国においてそうであるが、コミュニティが高齢者にとって、優れた生活の場のひとつであることに気づくべきであろう。

なお、論文作成のための現地調査がコロナの影響で、高齢者へのインタビューが途中でまったくできなくなった。そのために、当初の計画と異なり、筆者の現地調査の割合が少なくなり、既存の調査報告書に依存せざるを得ないところが出てきた。結果として筆者がぜひ知りたいと思うデータを十分に集められなかった。それもあって、

コミュニティのもつ課題・問題点などについても検討できるだけのデータが集められなかった。今後の課題としておきたい。

注

1）この高齢者施設についてのいわば公的な説明内容と、類似の内容を以下の実証研究がその結果を示している。酒井郁子、吉本照子などは「看護職、介護職が認識している老健入居者の生活リズム調整援助の効果」について面接をし、以下のことを明らかにした。「その効果の性質から、生体リズムの回復、情緒・感情の活性化、基本的生活ニーズの充足、充実した交流、自立、自律という入居者への意義があり、生活リズム調整援助はその人固有の生活リズムを見出し支え拡張を促すプロセス」（酒井郁子、吉本照子など、2008、p. 61）であると指摘している。

2）Ｆさんは定年になったときに隣のマンションの人から誘われて、ボランティア活動に参加するようになった。彼は長年、ワイヤーの工場で工場長として働いていた。若い頃は趣味はなく、家族のことも考えないで、仕事だけに夢中になっていた。

　Ｆさんが言うには、ボランティアは今までの会社の仕事と違う。会社は目標を達するために、常に頑張らなければならなかった。しかし、ボランティアには気楽さがあり、やったら成果が出たり、もし何か足りない所があっても「ごめん」と言うことで許してもらえた。

3）この高齢者のための施設とコミュニティとの関係は、高齢者問題だけにとどまるものではない。たとえば、精神病者に対する施設（精神病院）とコミュニティとの関係についても研究が進んでいる。そして端的にいえば、本稿と類似の指摘なっている。イタリアの精神医療を人類学的に研究した松嶋健によると、「精神病院という装置」は「客観化・モノ化ということであり、人〈病人〉を“客”の位置にとどめておく」。他方、地域〈コミュニティ〉は「生態学的テリトリーである。そこはくつろぎがあり、遊びのある場所であり、利用者たちの生がそこに編み込まれていくことで“主体性”を具体的に行使できるようになっていく集合的な環境である」（松嶋健、2014、p. 381）。精神病者に対する地域のもつ積極的意味を評価している。

参考文献

新井康友・原田由美子「超高齢社会における高齢者介護支援」『関西学院大学出版会』、2015年、p. 44

あなぶきの介護「介護付き有料老人ホームの特徴とメリット・デメリット」
https://www.a-living.jp/contents/72/　閲覧日：2022年２月11日

藤原武弘、来嶋和美「老人ホームの老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究」、『広島大学総合科学部紀要』、1989年、p. 63

羽田圭子「広がりつつある高齢者の見守りの現状と今後のあり方について」みずほ情報　総研レポート、2017年、p. 2

原田聖子「高齢者施設における虐待の発生と対応：先行研究の検討を中心として」『東洋大学大学院紀要』、2014年、p. 75

厚生労働省社保審―介護給付費分科会の施設・居住系サービスについて、pp. 1-2
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000044903.pdf　閲覧日：2022年２月11日
厚生労働省、社保審―介護給付費分科会の介護老人福祉施設第143回（介護参考資料２）p. 18
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000171814.pdf　閲覧日：2022年２月11日
厚生労働省令和元年度「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果」
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000196989_00003.html　閲覧日：2022年２月９日
上條秀元「高齢者の居場所づくりについての一考察―“ふれあいサロン”の活動に即して」『宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要』12号、2007年、p. 2
川村匡由「高齢者福祉論」『ミネルヴァ書房』、2005年、pp. 170-172
楠永敏恵・山崎喜比古「介護老人保健施設に入所した高齢者の“満足”“不満”ならびに“不満への対処”の分析」『社会福祉学』、2003年、pp. 86-87
丸尾直美・宮垣元・矢口和宏「コミュニティ再生」『中央経済社』、2016年、p. 109
森川洋「2010・2015年の国勢調査からみた高齢人口の地域的特徴」『地理科学』、2018年、p. 45
守永英輔「高齢者の社会参加」『生きがい研究』、2006年、p. 32
幡郁枝「地域のニーズに応えながら自らの生きがいも作り出す　ナルクびわこ湖南」『まちむら』、2010年、pp. 17-19
中河原文「高齢者同士で支えあう、週に一度の“ふれあい朝市”」『まちむら』、2010年、pp. 14-16
NEC ユーザー会ホームページ『MY CHRONOLOGY～未来へ続く年表～塩崎農園/日中花甲志願者協会　塩崎三郎氏』https://jpn.nec.com/nua/my-chronology/07/　閲覧日：2022年２月11日
中村美智代「高齢者の居場所研究についての動向と課題」『甲子園短期大学紀要』、2017年、pp. 17-18
中村美智代「入所施設を利用する高齢者の“居場所感”に関する予備的検討」『甲子園短期大学紀要』、2018年、p. 23
中村美智代・大橋徹也・松山光生「高齢者の居場所感質問紙の作成と在宅高齢者の居場所感に関連する要因の検討」『最新社会福祉学研究』14号、2019年、pp. 36-37
大橋美幸「グループホーム及び高齢者施設における“高齢者虐待”に関する調査―グループホームでの虐待公表を受けて」『函大商学論究』、2012年、p. 85
小黒一正・平方啓介「人口減少・超高齢化下での介護施設の配置のあり方及び GIS（地理情報システム）の活用に関する一考察　新潟市を事例に」『フィナンシャル・レビュー』2017年、p. 68
大藤文夫「ふれあい広場の誕生―呉市三条地区の事例」『広島文化学園大学ネットワーク社会研究センター研究年報』、2016年、p. 54、p. 56
奥村司「元気に楽しく生きるための体操教室を開講」『人生は二幕がおもしろい』健康・生きがい開発財団、2014年、pp. 14-19
沖中正明「高齢者の笑顔が絶えないディーサービスの運営」『人生は二幕がおもしろい』健康・生きがい開発財団、2014年、pp. 26-31

鈴木幾多郎「高齢者の“第三の居場所”のデザイン」『桃山学院大学総合研究所紀要』、43巻1号、2017年、p. 146
清水英孝「住民手づくりのプログラムで高齢者等の交流を促進」『まちむら』、2014年、p. 11、p. 13
津軽谷恵「在宅高齢者と介護老人保健施設入所者の主観的 QOL について―Visual Analogue Scale を用いて」『秋田大学医学部保健学科紀要』、11巻1号、2003年、p. 46-54
鄭春姫「高齢者の生活における外出の重要性に関する研究：外出支援の在り方について」『浦和論叢』、54号、2016年、pp. 26-27
飛田英子「高齢者向け住宅政策の現状と課題―地域主導でサ高住の機能拡充を」『JRI レビュー』、2015年、p. 52
吉岡なみこ「介護職の“専門性”に対する認識と評価：介護老人福祉施設の場合」、『福祉社会学研究』、8巻、2011年、pp. 106-111
横橋孝保「地域の交流の場としての車内　温かな会話が、今日もつながりをつないでいく」『まちむら』、2010年、pp. 14-16
永松美菜子・村山浩一郎「特別養護老人ホームにおける介護職員への職場内集合研修の現状と課題：北九州市における特別養護老人ホーム（介護老人福祉施設）を中心に」『福岡県立大学人間社会学部紀要』、25巻1号、2016年、p. 24
酒井郁子・吉本照子「介護老人保健施設入居者への生活リズム調整援助の効果の構造」『千葉看護学会誌』、14巻2号、2008年、p. 61
丁英順「日本老年福利施設的発展及啓示」『東北亜学刊』、2016年、p. 63
伊藤智子・加藤真紀他「特別養護老人ホームで生活する高齢者のエンパワメント支援に関する検討～施設入居前後の社会関連性の変化から」『島根県立大学短期大学部研究紀要』、1巻、2007年、p. 52
松嶋健「ピシコナウティカ　イタリア精神医療の人類学」『世界思想社』、2014年、p. 381